

〔書評〕

穂村弘

『はじめての短歌』、河出文庫、二〇一六年一〇月

鈴木隆芳

ある本質論までいくと、詩歌には詩歌の言い分があるわけだ。地球を存続させるという観点からは、会社より詩歌のほうが重要なんだっていうね。極論がありうる。

〔本書、八二頁〕

この一節を聞いてどう思うだろうか。てんで話にならない、と歯牙にもかけず切り捨てるか。もしくは、そうかもしれないけど……、と釈然としないまま言いよどむであろうか。だが、これはマージナルな境地からの放言などではない。「極論がありうる」という言い方は、むしろ謙遜のように聞こえた。詩歌には世界を存続させるに足る叡智がある。それは、生存を目的とした生産や労働といった社会上のシステムでは担うことのできないもの、さらには、近代の自然科学や経済学が扱いに手を焼きつつも、だからと言って、無下に一蹴することもできず、なんとなくもやもやしたまま抱え込んで

たもの、そんな未定形で不透明なものに向き合う叡智なのである。

穂村さんは、ある同一の人物が会社で課長でいる時と、帰宅して家庭で夫になる時を対比させ、「生きのびる」と「生きる」という二種の生の違いを説明する。会社が「生きのびる」ためには課長代理が必要だ。不可欠なもの、唯一無二のものが少なければ少ないほど、それだけ組織は生存において有利になる。代理、代役、交代要員などの層の厚さは、組織の強靱さを示すバロメーターである。ところが、組織のリスクを回避するためのこうした方策は、「生きる」という次元での生の質を少しも担保しない。夫の代理がいつでも控えているような家庭は、どうにも雲行きが怪しい。

人はこうした二重の生を生きている。「生きのびる」ために、食べたり、寝たり、薬を飲んだり、そんな時に私たちは生物種としての必然を受け入れている。食物や睡眠の摂取、

さらには投葉などは、おしなべてだれにも同様の効果をもたらし、また、労働や消費といった経済活動は、効率性や有用性に基ついた均質な価値の交換に還元される。「生きのびる」とは、こうした非人称の営みのことである。

一方、「生きる」という次元では、生は自然の法則性や、合理性を逃れた固有の価値を帯びる。それは共通の度量衡を欠くゆえに、等価物と交換したり、代理を立てたりすることのできない価値である。

平素、人はこんなことは考えずに出勤し帰宅する。二つの異なった位相にある生存と生は、日々の営為では整然とした棲み分けのもとにある。だが、時として、なにかのきつかけで生は生存を侵犯する。それは生が、生きのびることにためらいを覚え、生存本能に待ったをかける瞬間だ。

そうしたどこか危うい契機を経ることで良い歌は生まれるようだ。本書で穂村さんは、添削を通じて二つの世界の違いを明らかにする。ただ、添削といっても、修正して歌を良くするのではなく、それとは反対に、語彙や表現を入れ替えて現にある歌を改悪する。改悪例を見て、もとの歌が宿す妙味を改めて味合うのだ。

一首目が歌人による短歌、その後に改悪例が並ぶ。

目葉は赤い目葉が効くと言ひ椅子より立ちて目葉をさす

河野裕子

目葉はビタミン入りが効くと言ひ椅子より立ちて目葉をさす

改悪例1

目葉はVロートクールが効くと言ひ椅子より立ちて目葉をさす

改悪例2

〔本書、一九頁〕

「赤い目葉」「ビタミン入り」「Vロートクール」のそれぞれが、生の異なる水準に対応している。「Vロートクール」は、市場経済における商品として、価格と薬効という二重の尺度によって査定される。要は、コストパフォーマンスを問われるのであって、したがって、その価値に勝るものがあればすぐにも他の商品に取って代わられるかもしれない。より良いものをより安く、そんなスローガンによって更新される世界がここにはある。「Vロートクール」は、市場経済が望む世界の有り様を体現しているのだ。

「ビタミン入り」も、ビタミンの機能だけに注目するならば、ほぼ同じことが言えるだろう。ただ、「Vロートクール」に比べると、ここにはある種の幻想が入り込む隙がある。「やっぱりビタミンが入っているのが効くのよね」と言う時、はたして、私たちはビタミンの組成や、生体における作用などをつぶさに考えているだろうか。むしろ、ビタミンという言葉

の響きには、「体に良いもの」を選択して撰取することを可能にした科学一般についての希望的観測が見て取れる。これと同質のファンタジーは、無農薬有機栽培や特定保健用食品などに今でも見られる。

河野裕子さんの短歌「赤い目薬」は、こうした社会とも科学とも異なる位相にある。目薬の赤はコバルトを含むビタミンの総称ビタミンB₁₂の色に由来するらしいが、そんなことはどうでも良い。目薬の赤は、そのまま回想の色なのであろう。わざわざ椅子から立ち上がり、天を仰ぎ点眼する所作には、実直や敬虔さえも感じる。商標でも効能でもない赤は、名と意味を失ったまま、この唯一の回想を直に染める。赤は社会からも科学からも見捨てられた言葉だが、だからこそ、この言葉となら回想の実相にまで降りてゆくことができる。

添削にあたっての改悪は、語彙の置換と代入によって表現上の価値がどう変化するかを吟味するという方法である。これはかつて構造言語学が言語の音韻を確定するために行った操作を思い起こさせる。音素/p/の無声性を有声性に置き換えれば、異なる価値を持った音素/b/が得られるといった具合に。ただ、形式上の操作は似ていても、短歌の添削はこれとはまったく事情が異なる。「赤い目薬」と「Vロートクール」の対立は、音素のように有声性(土)といったデジタルな差異に還元することができない。実際、言語の意味を構造化しようとした言語学が大した成果を上げられなかったのも、言語は意味と関わる領域では、そうやすやすと言語学者の手に負

える代物ではなかったからだ。

そして、もう一つ、穂村さんの添削が面白いのは、個々の語義の絶対値にとらわれることなく、その語彙を取り巻く周囲との相対的な強度差を問題にしているという点である。

た UFOが現れたとき専務だけ「友達だよ」と右手を振った

須田覚

た UFOが現れたとき詩人だけ「友達だよ」と右手を振った

改悪例

〔本書、一二五頁〕

社会一般では「詩人」は「専務」よりも中核から外れており、ならば、ここでも「詩人」を選んだ方が優れた短歌になりそうなのだが、それはちがう。UFOという不思議の後に今さら詩人がきてももう驚くことはない。一方、UFOと専務の間には明らかにギャップがあり、そこにサプライズが生じる。この強度の変化がもたらす驚きを穂村さんは「驚異」と呼び、それが生じるためには「くびれ」が必要だと言う。「くびれ」をもたらしすのは、太↓細↓太といった変化であり、絶対値としての太さや細さではない。会社の論理にどっぷり浸かった専務と、現実離れたUFOだからこそ、ここには

「くびれ」が生じている。「短歌を作るときは、チューニングをずらす」、その言葉の意味するところは、こうした異なる世界どうしを接触させ、違和を生むことだと思ふ。

こうした違和は、たとえば穂村さんの次のような短歌からも感じることができる。

赤、橙、黄、緑、青、藍、紫、きらきらとラインマーカー
まみれの聖書

穂村弘『手紙魔まみ、夏の引越し（ウサギ連れ）』

〔小学館、二〇〇一年七月、六六頁〕

大学生の頃、キリスト教概論という教養科目があった。礼拝に出てレポートを書くことが課されたので、社会科見学さながらにメモを取りながら牧師の説教を聞いていたところ思いがけず注意された。メモを取る行為には、一般には勤勉や健気といった印象が伴うが、ところが、ここではそれが不遜に当たるらしい。メモを取るとは、牧師の説教を、これは大切と感心することでありながら、その反面、メモに控えるには価値のないことを見抜き淘汰することでもある。

聖書にラインマーカーを施し、こちらの都合で色に応じたヒエラルキーを付けるのは、聖書の教えを解体し、個々のパーツを受験勉強のように学ぶことである。音読みして「セキ、トウ、オウ、リョク、セイ、ラン、シ」。まるで忍者や密教の僧が今にも術を施そうと、掌の指を組み合わせて印契を結

んでいるかのようだ。聖書という純化された因果律の世界は、現世の狡猾な知恵によって浸食されてゆくのだろう。プリズムで分光され、無垢の彩を失い猥雑なまでに色分けされた世界。大罪の数と同じだけの七つの色。そんなたった七つの意味で満ち足りてしまう世界に私たちはいるのかもしれない。

本書の解説を書いている山田航さんは、ここでの短歌の発想がビジネスの現場でも役に立つと言う。「効果的でない」「意味がない」「お金にならない」というネガティブな価値に重きを置く短歌は、社会の周縁や間隙にあって見過ごされてきたものを明るみに出す可能性がある。ただ、そのためには異質な世界どうしの邂逅から生じる「ずれ」を演出する必要がある。すべてはここにかかっている。そう簡単なことではない。私たちの意識は夢遊状態のままひとつの世界の中に居座ろうとする。穂村さんの改悪例は、そうしたまどろんだ意識が従う傾向を暴いている。一方、それと対極にあるのが詩歌の醒めた意識である。改悪例にほんやりとうなずき、オリジナルの短歌にはとさせられるのはそのためだ。詩歌は夢想に浸るためにあるのではない。そうではなく、世界を醒めた目で見るとするための覚醒を得るがためにある。そして、そんな叡智を私たちは必要としている。

注記

本書『はじめての短歌』は、二〇一四年四月に成美堂出版より刊行されました。その後、二〇一六年一〇月に河出文庫から刊行されるにあたって、山田航さんによる解説が新たに巻末に掲載されています。

本文で引いた穂村さんの短歌「赤、橙、黄、緑、青、藍、紫、さらさらとラインマーカーマミれの聖書」に言及するにあたっては、穂村弘・山田航『世界中が夕焼け 穂村弘の短歌の秘密』（新潮社、二〇一二年六月）を参照しています。